

世界とつながる音楽表現： 感性的コミュニケーションとグローバル人材育成

北海道大学大学院教育学院博士後期課程

Et Bon Voyage 代表 戸澤 里美

はじめに

音楽とは、人々の暮らしや伝統、そして歴史を反映する、文化の一形態である。たとえば海外の音楽に触れる時、たとえその土地を実際には訪れることはなくとも、メロディーを通して、そこに住む人々の暮らしを想像し、感じることができる。また、昔から歌い継がれている童謡やわらべ唄は、長きにわたり、我が国の文化を継承してきたものである。筆者は日本の大学を卒業後、カナダで民族音楽を研究するかたわら、ピアニストとして演奏活動に携わってきた。生まれ育った日本とは異なる環境の中で、カナダをはじめ、諸外国の作曲家の作品を通して、これまで知ることのなかった新たな文化を体験することに加え、日本の童謡や日本人作曲家の作品と向き合い、演奏という形で発信することで、多種多様な人々と、日本の文化を共有してきた。このように音楽とは、たとえ言葉によるコミュニケーションが困難な場面においても、非言語的に文化を伝達すると共に、自己を表現するための媒介項となる。そして、その視点に立った時、音楽の持つ多種多様な人々の間に結び付きや相互理解を生み出すという特徴は、国際的な視野を持った人材育成においても、重要な役割を担うものとなる。

音楽の固有性とグローバル人材育成

音楽の固有性とは、非言語的な表現や身体性を内包し、感情や気持ちを媒介する、感性的コミュニケーションをもたらす点である。つまり、言語を使用しない何らかの表現伝達のように、感情や共感が、人と人とのつながりを生み出すということである(笠原、2012)。そしてこの点は、グローバル化が進み、自分とは異なる背景を持つ人々と接触する機会が増える中、外国文化への知識や理解を兼ね備えた人材育成に向けて、音楽が有効な媒体となることを示唆している。国内においても、とりわけ若い世代が国際性を身に付けることの重要性が指摘されているものの、世界で初めて多文化主義政策を導入したカナダをはじめ、日本よりも早くから多様性と向き合ってきた諸外国と比較すると、我が国の多文化共生政策や、グローバルな人材育成のためのカリキュラム構築は、まだ始まったばかりである。そこで、子ども達が早い段階から多様性を受け入れ、尊重する姿勢を身に付けることを目指し、2013年に帰国後は、若い世代が音楽を通して様々な文化に触れ、新たな世界を知ることが目的とした、

コンサートやワークショップを行っている。そして、音楽の固有性に着目し、単に演奏を聴くだけではなく、自身も制作や演奏に参加することで想像力を膨らませると共に、メロディーやリズムを通し、異文化そのものを体で感じることを可能とするプログラムを提供している。

音楽で世界一周旅行

2018年に、小学生を対象に実施したワークショップおよびミニ・コンサートでは、「音楽で世界一周旅行」というテーマのもと、導入として、アフリカのリズムをテーマとした絵本「アフリカの音」を朗読した後、絵本に登場した楽器を参考に、児童達がドラムを制作し、思い思いのデコレーションを施した。また、その後のミニ・コンサートでは、世界地図を示しながら、アラスカ先住民族の音楽やアルゼンチンタンゴのように、それぞれの曲にちなんだ国や地域の生活文化を紹介し、ピアノ演奏を行った。そして、アフリカ大陸の場面では、児童もステージに上がり、手作りの楽器を手に、アフリカ民謡のリズムに合わせたドラム演奏および歌唱を行った。さらに、コンサートの最後には、世界一周旅行の締めくくりとして、児童・観客全員で、日本の唱歌「ふるさと」を歌った。世界各地の様々な音楽を通し、これまで自分が知らなかった文化が存在することを知ると共に、最後に自分達のルーツである日本の「ふるさと」を歌うことで、いつまでも故郷を忘れず、大切に思う気持ちを持ってほしいという願いを込めている。

国際色豊かな人づくり事業：わくわく異文化交流

2019年には、日本とカナダの小学生を対象に、音楽に加え、美術や料理等の要素も交えた、オンライン文化交流を実施した。北海道北見市と、交流先のマニトバ州ブランドン市には、身近に野生動物がいる自然環境や、夏は暑く冬は寒い気候、そしてカーリングのようなウィンタースポーツが盛んである等、多くの共通点が存在する。この交流で重要視した点は、英語を使って会話をすることではなく、美術や音楽のように、非言語的要素に重点を置いて、互いの文化を伝え合う点であった。したがって、日本の児童は、北海道の文化を紹介するための絵画や工作物、カナダの児童は、先住民族に伝わる装飾品であるドリームキャッチャーを制作し、音楽を通じた交流では、日本の児童が、先住民族の少女と白人男性のラブソングである、カナダ民謡「Red River Valley (赤い川の谷間)」を、そしてカナダの児童が「ふるさと」を練習し、互いに披露することとなった。Red River Valley は、穏やかな曲調のフォークソングであるものの、その歌詞は、カナダにおける先住民族と非先住民族の複雑な関係性や、それによって悲しい思いをした人々がいたという、カナダの過去を表現したものである。児童達との歌唱練習の中で、歌詞の内容を確認し、登場人物の気持ちを想像しながら歌うことで、カナダの歴史に触れることができた。

マニトバ州ブランドン市とは、15時間の時差があるため、実際の交流は、翌日早朝 5:15 から、スカイプを通じて行った。制作物の紹介や歌の披露の他、両地域の共通点である野生動物をテーマに、カナダの美術の先生からヘラジカのイラストの描き方を教えてもらい、日本の児童は、折り紙でウサギやキツネの作り方を紹介し、共に制作活動を行った。そして交流の最後は、日本では朝食、カナダでは夕食の時間帯であったため、日本側はおにぎりとお味噌汁、カナダ側はピザやビスケットのように、

互いの食文化を紹介し、カメラ越しに一緒に食事をとって、活動を締めくくった。

この交流では、オンライン上ではあったものの、日本・カナダ両国の児童が、歌唱や制作、また食事のように、実際に活動を共にすることで、互いの文化をより身近に感じることができた。それぞれの作品を見せ合うだけでなく、折り紙の制作や動物の描写を通し、色の使い方、また表情の描き方のように、1人1人の個性を知る経験はもちろん、日本の児童達は、カナダの子ども達が日本語で「ふるさと」を練習し、披露してくれたことが、とても嬉しかったと話していた。また、スカイプ越しに見る景色の違いから時差を実感することや、スクリーンを通して一緒に食事をする体験から、食べ方やマナーの差異に気付く経験のように、どんなに些細なことであっても、異文化を肌で感じることに、視野を広げることができた。もちろん直接現地に赴くことで得られる、その土地の人々との対話や、五感で異文化を感じる体験と比較した際、オンライン上の交流では、同様の効果を生み出すことは困難かもしれない。しかし、若い世代が異文化に触れ、興味を持ち、相手をより深く知りたい、そして自分のことをもっと伝えたいと感じるきっかけを生み出すことは、国際性を持った人材育成において、重要な要素である。

オンライン・ツールを活用した音楽活動のあり方

上記2つの取り組みは、いずれも地元にいながら、自分達の文化を再認識すると共に、自分とは異なる文化を、非言語的要素を介して経験することで、世界とのつながりを生み出した事例である。国際交流に必要なスキルとは、外国語の習得のように、言語でのコミュニケーションを基盤としたものをイメージしがちであるが、非言語的な要素を介し、活動を共にすることで、互いの文化を経験することができる。つまり、知識として異文化に関する情報を得るだけでなく、実際に自分の身体を使い、相手と共に活動に携わったからこそ、感性的コミュニケーションがもたらす感情や共感を通し、相互への理解を深めることができたと考えられる。

これらのプロジェクトは、いずれも新型コロナウイルス感染症流行以前に実施したものであるが、オンライン・ツールを活用した演奏会や講演会のように、ここ数年間で、世界とのつながり方にも大きな変化が見られ始めている。たとえば、世界を舞台に活躍する演奏家や一流のオーケストラによる公演、さらにはバレエやミュージカルのように、これまでは直接会場に足を運び、生で鑑賞することが当然であった様々な芸術文化を、オンライン配信を通して、自宅にいながら楽しむ環境が生まれつつある。大御所と呼ばれる演奏家のコンサート、また人気の高いイベントについては、チケットの入手が困難である点に加え、居住地域や生活スタイルによっては、交通費や宿泊費のような経済的負担、また時間の制約等により、これまで芸術文化へアクセスする機会を持つことができなかった人々も、様々な条件が緩和されたことで、より身近に、より気軽に、芸術文化を楽しむことが可能となった。さらに、これまでは対面での実施が当然であったマスター・クラスや講義のように、音楽をはじめとする文化的な学びの場がオンラインで提供され始めたことにより、技術の習得および芸術に関する知識を得る機会、また、同じ領域で活躍する人々と知り合う場も増えつつある。

そしてこの変化は、グローバルな人材育成においても、新たな学びの形を提案し得るものである。筆者もこの春に、0～5歳児を対象に、音楽・美術・英語を融合した学習カリキュラム、「Et Bon Voyage」を立ち上げた。毎週のレッスンに加え、カナダの子ども達との定期的なオンライン交流を通

し、国際感覚を身に付けることを目的としている。幼少時から音楽を使って英語に触れ、耳を鍛えることはもちろん、世界とつながる体験は、英語の習得のみならず、音楽や美術のような非言語的要素を活用した交流の機会を通し、自分らしさを発信するための様々な手法を試すことができると同時に、自分にとって最適な表現方法を見付けるきっかけともなる。また、対面とオンラインとを織り交ぜた形式でレッスンを実施しているため、インターネットの環境が整っていれば、居住場所を問わず、学びの機会を得ることができる。多様性を尊重するためには、異文化を受け入れることはもちろん、自国のことを正しく理解し、発信する力も同じくらい大切である。Et Bon Voyage も、英語に加え、音楽・美術のような非言語的要素を活用して異文化を体験すると共に、自分達を育てている日本の歴史や文化を知り、自分らしく表現する力の育成を目指している。

国際的な視野を持った音楽家の育成に向けて

このように、音楽を含む非言語的要素を活用した相互理解、つまり感性的なコミュニケーションを介して世界とつながる体験は、自分達の文化を正しく伝達すると共に、多様性を受け入れ、尊重する態度を身に付けた若い世代が、よりグローバルに活躍するための可能性を広げるものである。国際的な視野を持った音楽家達を育てるためには、これまで親しんできた音楽とは異なる地域や文化の表現に触れる等、様々な芸術形態を通して新たな世界を知り、自己表現の幅を広げることが求められる。そのためにも、若者達が多様性に触れ、自分の声を世界に発信するための方法を模索する環境を、周囲の大人達が整えていくことが重要となる。オンライン・ツールの活用も含め、良い意味で世界が狭くなりつつある現在、様々な選択肢の中から自分に適した表現方法を見付け、世界とのつながり方を見出すための土壌を整えることが、国際的な視野を持った音楽家育成のために不可欠な要素であると考える。

【参考文献】

笠原広一(2012)「芸術教育におけるコミュニケーション研究の試論：感性的コミュニケーションの視点から」
京都造形芸術大学芸術研究センターこども芸術大学『美術教育学：美術家教育学会誌』第33巻、159～173頁。